

私は第 2 回全国大会洞爺湖集会で教育分科会のコーディネータを担わせていただいたが、全国のジオパークの取組からおおいに学ぶことができた。しかし、それ以来現職中ということもあり、なかなか参加できずにいた。

退職により時間的な余裕ができたこともあり、今回参加を希望した。

1. プレジオツアー

大会開会に先立つプレジオツアー「火山と信仰、阿蘇のエッセンス凝縮ツアー」に参加した。屈斜路カルデラに次ぐ日本 2 番目の大きさの阿蘇カルデラ内に人々が住み、営々と生活し続けたことは大いに興味を引くところであった。

阿蘇駅に到着すると、高さに起伏がない北外輪山が目に飛び込み、阿蘇カルデラのダイナミックさに感動を覚えた。

ツアー一同と合流し、さっそく阿蘇カルデラの中央火口群に向かった。阿蘇カルデラは、中央構造線上にあり、そのすぐ西側に熊本地震を起こした布田川断層が走るという地殻変動の大きなエリア内にある。おおよそ 27 万年前から 9 万年前までの 4 回の大規模噴火 (Aso-1, Aso-2, Aso-3, Aso-4) によって大量の火山礫や火山灰を噴出し、広範囲に火砕流を到達させて火口の周囲にカルデラを形成した。とりわけ大きなものは 9 万年前の Aso-4 で、マグマ噴出量は 600 km³ (洞爺カルデラを形成した噴出量は 100 km³) にも及んだ。火砕流は九州を越えて山口県宇部市にも到達しすという破局噴火だった。その時の火山灰は北海道まで到達していることはよく知られている。

おおいに疑問だったのは、カルデラ内に水がたまってカルデラ湖にならなかったのかということだったが、カルデラ湖になっており、その時期から中央火口群の活動も始まったという。その水がなくなったのは、西側の外輪山が断層の動きによって崩れ、さらに浸食があり峡谷となって湖水がなくなったという。それは、神話となって、満々と水をたたえるカルデラ湖を田畑にしようと神武天皇の孫神が外輪を蹴破って水を抜いたとされている。天変地異が神のなせることとして人々が受け入れてきたことは、古今東西同じだと感じたとともに、ここが地殻変動のただ中にあるということを実感した。

中央火口群は、五岳と呼ばれる高岳・中岳・烏帽子岳・杵島岳・根子岳から形成される。中岳は現在も活発に活動しており、2015 年以降、小規模な噴火が繰り返されており、3 年前の熊本地震では現在噴火警戒レベル 2 で、火口周辺規制になっている。絶えず水蒸気をあげていたが、我々が展望台から中岳を監察していたところ、黒煙に変わった。いつもはある火口内の水が涸れると、火山灰を噴出し黒煙になるとのことだった。

火山博物館は、動植物の解説なども含めて充実していた。また、地球史にも触れながら阿蘇山カルデラの成り立ちから現在までを映像や展示物であらわし、興味を駆り立てられるものだった。

カルデラ内にはいくつかのスコリア丘があり、一番新しいものは 3000 年前の噴火でできた「米塚」で、きれいな円錐形が典型的なスコリア丘になっていると感じた。ここでは溶岩トンネルに入れたそうだが、熊本地震により入れなくなったそうである。ここが源泉となって、温泉地が拓かれている。その他にも、田畑や牧草地、湧水地など、火山の恵みとともに人々が暮らしていることがよく分かった。

ガイドのみなさんは私と同年代かもう少し上と思われる方 5 人が、それぞれのエリアを分担して解説してくださった。事前にリハーサルも行ったという。熱心で詳しい解説に感謝したい。

2. 基調講演 『「風景」に「ストーリー」を見つける』 相部任宏氏(「ブラタモリ」チーフプロデューサー)

「ブラタモリという番組を「教養を娯楽にする」と位置づけている。教養番組というと、・難しくて落ちがない
・面白くない ・なんの役に立つのか分からない といった印象だろう」

「さらに、教養という一方で、・掘り下げが浅い ・本を読んだ方が良い といった印象も持たれる」

納得できる話である。真面目に熱心にやったつもりでも、まったく伝わらないことがある。その一方で、片手間にやるとさらにつまらなくなり、つたわらない。

「わかりやすく、面白く、しかし深くということを考えてつくっている」

井上ひさしの文章に、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、ゆかいなことをいっそうゆかいに」というものがある。この精神と似たものを感じた。

「違和感を提示していく。何気なく見ているが、そう言われるとそうだなということが番組の大事なところ。それを、意外性で結びつけていく」

ガイドもそうなのだろう。ガイドなしでも、掲示板を読めば分かることもあるのだろう。ガイドはそれ以上のことを話す必要がある。それが「意外性」をもつと学びがさらに印象的で深くなるのだろう。さらにそれがあ「面白い」と結びつく。

「タモリに同行しているアナウンサーは視聴者のアバター。視聴者はアナウンサーのレベルで視聴している」

我々がガイドする多くの方は、ここでいうアナウンサー。その人のレベルで分かりやすく、面白く、しかし深いことを、意外性とむずびつけてガイドを考えたい。タモリのような人はそのレベルで。それぞれで腑に落ちるガイドになりたい。

「現地調査を入念に行う。担当プロデューサーは3日以上現地で調査をする」

わかりやすく、面白く、深いガイドのためには、慣れ親しんだ場所であってもよく準備する必要があるのだろう。それとともに、準備したことの多くは捨てなければガイドにはならないのだろう。

「伝わるというのは熱量。熱量をいかに感じさせるか。」(講演後のシンポジウムで)

独りよがりの「熱量」ではなく、素材の価値をしっかりとつかんだ上で、熱を持ってやる。

印象に強く残ったことだけを述べたが、1時間の講演時間が短く、もっと聞いていたいと感じさせる講演だった。

3. 分科会「保全」

①銚子ジオパーク 屏風ヶ浦の2.5km沖合に風力発電所の設置が提案されている。富士山の裾野が切れている眺望にかかってくる。どう考えるか。

各地からの意見では、海に面している少なくない場所で風力発電所設置の計画があるとのことだった。その中では地場産業の衰退の中で、補助金をちらつかせての交渉もあるとのこと。人体への影響、動物の生態

系への影響も指摘された。

②室戸高校「ジオパーク学」を通しての生徒たちの活動と学び

生徒たちが地域の中で、自ら課題を見つけ、その解決を3年間かけて学ぶということだった。「保全」を考えると、室戸のシュウリ貝の化石をどう守れば良いかという課題での学びが報告された。

③糸魚川ジオパークの事例報告

ジオパーク協議会内に保全部会ワーキンググループを設置。そこで、情報収集、研究、モニタリング調査、リスト作成などを行い、保全のルール of 立案と周知、学術調査や観察会に対する助言活動を行っている。具体的には ・ムラヤママイマイの地元住民対象の学習会 ・マイコミ平の植物モニタリング調査 ・植物、昆虫、陸貝、両生類、爬虫類のリストづくりをし、来春にはウェブサイトで住民と共有するという。

4. その他

交流会では来年の大会実施地である島根半島・宍道湖中海の方々をはじめ、全国の方々と交流し、名刺交換やFBでの交流などで顔の見える関係に近づけた。

分科会会場屋外では、各地域のブースでそれぞれの地域の活動内容を学べた。体験ブースでは、京都大学のダジックアースづくりに参加し、プレート境界線地球儀を作成した。これは、ぜひ小中学生に体験させようと思った。

大会後は雲仙普賢岳の火砕流跡や土石流跡、博物館を訪ね、良い学びとなった。